

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Heritage Tourism and Uprisings by Indigenous People : Inca Ruins in Ecuador, South America

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001705">https://doi.org/10.15021/00001705</a>

## 遺跡観光と先住民蜂起 南米エクアドルのインカ遺跡

関 雄二  
国立民族学博物館

### Heritage Tourism and Uprisings by Indigenous People Inca Ruins in Ecuador, South America

Yuji Seki  
National Museum of Ethnology

エクアドルの南部高地に位置するインカ時代の遺跡インガピルカにおいて、遺跡の保全や管理運営への関与を求めることから始まった先住民運動は、最終的に、管理運営と観光開発をほぼ独占する法令改正にまで発展した。この先住民の行動は、植民地時代以来の経済的格差に対する不満の表明であり、自らの文化遺産を取り戻そうとする動きと位置づけられる。しかし、運動の主体は、この地で、かつてインカに虐殺されたカニヤリという先住民の末裔であった。ここには、反インカの記憶を、独立以来、国家が推進してきたインカ礼賛の歴史観や歴史教育、あるいは近年締結されたインカの故地である隣国ペルーとの和平合意などの中で、巧みに組み替えていった彼らの自律的な生存戦略が見いだせる。

In the Ingapirca archaeological site belonging to the Inca period, located in the southern highlands of Ecuador, the indigenous people movement that started from the request of participation in the maintenance of the ruin and its management has developed even into the law revision that almost finally monopolizes management and tourism development. Such indigenous people movements are the declarations of dissatisfaction to the economic gulf from the colonial epoch, and it can be considered move to try to regain an own cultural heritage. However, people who had promoted the movement were Cañari who were descendants of indigenous people having been slaughtered by Inca before. We can find the autonomous strategies of the indigenous people who skillfully rearranged anti-Inca's memory in the education of history to admire for Inca which the nation has promoted after independence, and in the political situation in which the peace accord was recently concluded between neighboring country Peru that is the Inca birthplace.

- |                   |             |
|-------------------|-------------|
| 1 はじめに            | 6 法令の意味するもの |
| 2 インガピルカ遺跡        | 7 カニヤリとインカ  |
| 3 インガピルカ城塞委員会との確執 | 8 歴史観の組み替え  |
| 4 国交から遺跡占拠へ       | 9 結語        |
| 5 法令の改正           |             |

\* key words: Ingapirca, Inca, Cañari, historical heritage, autonomous strategies

\* キーワード: インガピルカ, インカ, カニヤリ, 歴史遺産, 自律的戦略

## 1 はじめに

南米エクアドルでは、2003年1月に新政権が発足した。新たに就任したルシオ・グティエレス新大統領は、合法的に選出された大統領ではあるが、元陸軍大佐として、2000年1月のクーデターを指揮し、当時のマワ政権を倒した経歴を持つ。またこのクーデターは、先住民が共闘した点で注目され(新木 2000)、今回の政権でも、外務大臣をはじめ、数名の先住民が入閣を果たしている(Vistazo 2003/1/23)。

本論では、こうした近年隆盛を極め、政治的にも注目される先住民運動のなかで、文化遺産の保存、運用に関わる権利を獲得していった先住民の事例をとりあげることとする。事例とは、2001年3月に南高地のインガピルカ遺跡を先住民が占拠した事実を指す。なお扱うデータは、この事件を取り扱った新聞報道、ならびに2003年1月にエクアドルで実施した短期間のフィールド調査より得られたものである<sup>1)</sup>。

## 2 インガピルカ遺跡

インガピルカ遺跡は、エクアドル南部高地のクエンカ州カニヤル郡に位置する(図1)。州庁所在地クエンカは、その旧市街地が世界文化遺産に指定され、歴史観光の拠点となっている。このクエンカから幹線道路を北上すること1時間半ほどでインガピルカ遺跡にたどりつく。海拔3160メートルの冷涼な気候に包まれた山間地に石組みの建造物がそびえ立つ(Durán 2000:8)。遺跡に隣接して同名の村もある(図2)。

ピルカとはインカの公用語ケチュア語で壁のことを指すので、インガピルカとは「インカの壁」という意味になる。この遺跡は、その名から推測されるように、かつてアンデス山脈沿いに栄えたインカ帝国の地方拠点であった。中心部にそびえ立つ石像建造物は、「城塞」あるいは「太陽の神殿」(図3)と呼ばれ、長さ37.1、奥行き12.35m、そして高さ3~4mの長楕円形を呈する(Durán 2000:34)。この楕円状建造物ばかりでなく、その周辺に控える建物を含めて、いずれもインカ帝国の都クスコのものに引けをとらない精緻な造りを見せている。エクアドルでは、こうした見栄えのする遺跡は、隣国ペルー



図1 インガビルカ遺跡の位置



図2 インガビルカ村

と比べるとはるかに少ない。その意味でも、エクアドルでは珍しい遺跡観光が成り立つ要件をそろえている場所といえよう。事実、年間に6万人もの観光客が訪れるという<sup>2)</sup>。

### 3 インガピルカ城塞委員会との確執

まず遺跡の占拠の経緯を新聞報道によって復元してみる。ことの起こりは、40年来、遺跡の管理を国より委託されてきたインガピルカ城塞委員会が、遺跡に隣接する村のインガピルカ農民先住民組織前線との間で交わした約束を反故にしたことにあるという(El Universo 2001/3/16)。外国人観光客が支払う入場料6米ドルのうち1ドルを、主に先住民で構成されたこの組織に渡すべきところ、3ヶ月以上も履行されなかった。この収入で教会建設という計画を抱いていた先住民は憤り、やがて怒りの矛先は、これまで運営面で彼らの参加を阻害してきた城塞委員会のあり方という、より大きな対象に向けられた。

「もはや問題は、お金だけではない。中央政府に対して、われわれに敬意を払うように、また先住民が大々的に運営に参加できるように、城塞委員会の再編成を要求した。……われわれは、先祖が残した遺産を管理したいのである。というのも今まで白人とメスティソ(混血)だけが恩恵を得てきたからである。」と答える先住民指導者の言葉がこの路線変更を物語っている(El Universo 2001/3/16)。こうして2001年3月11日にインガピルカ遺跡は先住民らによって占拠されてしまうのである。

こうした新聞報道の内容は、おおむねフィールド調査で得られた情報と合致するものではあるが、若干のデータを補足しておきたい<sup>3)</sup>。まず、インガピルカ城塞委員会が結んだ協定書については、どうやら、末端の地方行政組織であるインガピルカ・パロキアに設けられたインガピルカ・パロキア中央委員会との間で結ばれたのが正しいようだ<sup>4)</sup>。以下に、インフォーマントのセグンド・パルチサカの説明をまとめる<sup>5)</sup>。

協定の内容は、新聞報道通り、村の教会の修復にあった。前年に結ばれた協定は、その年の7月から10月まではきちんと履行されていたが、それ以降は滞っていたという。その後、4ヶ月以上にわたってインガピルカ・パロキアは城塞委員会へ支払いを求めていくが、埒があかなかつたため、別の行動に出る。

パロキアは、当時、インガピルカ農民先住民組織前線の会長職にあったパルチサカを3月11日の夜の会合に招待し、彼を中心に戦略を練ることにした。さほどキリスト教に傾倒していない彼は、文化遺産から得られる収入を、教育や文化活動に充てるならばいざ知らず、教会建設という宗教活動に向けることには反対であった。闘争路線を変更するためにも理論武装が必要と感じたパルチサカは、先住民の権利として憲法第84条第10項に記された「文化遺産と歴史遺産を維持し、発展させ、管理する権利」という条文を持ち出す。これを根拠に、遺跡管理への参加を城塞委員会に要求しようという提案を行ったのである。

具体的には、遺跡博物館の館長に専門家を任命すること、収入の50%は観光振興に用いること、城塞委員会に先住民をもう1名参加させることなどである。こうした要求を委員会に突きつけ、拒否された場合、中央政府に法令改正を訴えるという二段構えであった。

要求項目の最後にある、先住民1名の要求については、多少説明が必要である。インガピルカ城塞委員会は、1996年に発足している。当時、崩壊の危機にあったこの遺跡を保護すべく、考古学者やエクアドル中央銀行の働きかけで設立された団体であり、政府組織ではない (Durán 2000 : 15)。文化庁アスアイ郡事務所、同庁カニャル郡事務所、カニャル市、カニャル大学、そしてインガピルカ先住民組織の代表者各1名から構成されている (Durán 2000 : 裏扉)。この組織が受け皿となり、遺跡の修復、保存、用地買収、管理など数々のプロジェクトが実施されてきた。この中には、1985年に開館した遺跡博物館の建設 (図4)、1989年に始まるインティ・ライミ祭の運営も含まれていた (Durán 2000 : 15-29)。

後述するが、カニャルの先住民にとっては、この祭りは自分たちの祭りという意識が強い。ところが、主催が城塞委員会であるため、指導権を握れないことに不満を覚えてきたようだ。実際に1993年の段階より、共催者としての参加を申し入れては拒絶されてきた。「これは我々 (城塞委員会) の祭りであり、あなた方は招待者である」という当時の城塞委員長ガロ・オルドーニェス・ガラテの言葉を記憶している人も多い<sup>6)</sup>。

#### 4 団交から遺跡占拠へ

翌3月12日に、前もって知らせておいたインガピルカ・パロキアに属する22のコムニダ (慣習的村落) の人々が挙げて現れ、遺跡前の広場は熱気に包まれた (El Universo 2001/3/16)。パルチサカは各コムニダの指導者を集め、城塞委員会への先住民代表をもう1名増やす点、委員会の会計の透明性を高める点など、要求項目について承諾を得る<sup>7)</sup>。

やがて会合の約束をしていたインガピルカ城塞委員会の委員長を務めるエドワルド・クレスポ (当時) がカニャル市の代表委員とともにやってくる。予期せぬ人数に、驚いたクレスポらは、近づくことすら躊躇したという。しかもクレスポは約束した城塞委員会の会計関係書類を一切持ってこなかったため、先住民側は激しく抗議し、具体的な内容を語り合うまでには至らなかった。2日後の14日に、再びこの地で会合を持つこと、すべての書類を持参することをクレスポに要求して会合を終わる。一部の先住民は、クレスポが乗ってきた城塞委員会所有の車を奪取し、強硬な姿勢も見せた。

ところが、14日の会合予定日には、クレスポら城塞委員会のメンバーは誰も現れなかった。電話で来訪を確認すると、そのような会合の予定すら知らないと答えたという。参集した先住民は、調整不足を指摘し、彼らの指導者を突き上げた。リーダーのパルチ



図3 インガビルカ遺跡遠景



図4 インガビルカ遺跡博物館

サカは、12日に合意していた戦略を再び読み上げることを強いられ、その結果、城塞委員会改革という部分的な要求ではなく、法令そのものの変更という大胆な方針を採択せざるを得なくなる。熱狂的な群衆の前で、これ以上冷静な対応で訴えることができなかったという。

先住民側の動きに対して、城塞委員会も黙っていたわけではない。新聞報道によれば、クレスポ委員長は、法律に則って設立され、運営されてきた城塞委員会の活動を損なうような行為は、法律違反であり、その結果生じる事態に対して何があっても責任を負うべきであると非難している (El Universo 2001/3/17)。また教育相にも経緯を記したレポートを提出し、介入を求める用意があるとも明言している (El Universo 2001/3/16)。さらに、「村は全く対話をしようとしていない。インガピルカ遺跡を管理する委員会の再編成のテーマは、エクアドル先住民同盟と政府との協議の結果、次週開かれることが決まった対話の場で取り扱われるであろう。」というように、もはや仲介者なしでは解決が難しいという判断を示している。

## 5 法令の改正

さて勢いに任せて法令改正要求を決定したものの、その実現は、法律家も助言者もないインガピルカの先住民だけでは土台無理な話であった。もちろんエクアドルには先に触れたエクアドル先住民同盟という巨大な組織があり、またカニャル郡にもカニャル郡農民共同同盟という団体は存在する。しかし元来、今回の件をインガピルカ・パロキア内部の問題ととらえていた先住民らは、より大きな組織が介入し、政治的に操作されることを恐れたという<sup>8)</sup>。とはいえ、法令改正という専門的知識と政治的立ち回りが必要な状況の中では無力さを感じざるをえず、結局は、これらの外部組織の助けを乞うことになる。

やがてカニャル郡農民共同同盟は改正案を提示し、エクアドル先住民同盟やエクアドル国民・民衆発展会議、あるいは政府も法律顧問を派遣し、案を練り上げた。ところが、こうした団体が提案した内容は、インガピルカ遺跡のみならず、ひろくカニャル郡全域の文化財を対象にしたものであったため、インガピルカ・パロキアの人々を納得させるのは容易ではなかった。他のパロキアを侵害するつもりは毛頭ないという態度であったからだ。

しかし最終的には、カニャル郡全域を対象とした法令の制定を受け入れることで決着がつき、同年5月3日付けの大統領令発令へと進む。同5月9日には、エクアドル国民・民衆発展会議の事務局長ルイス・マルドナードがインガピルカを訪れ、300人の先住民を前に、遺跡の管理権譲渡を宣言した (El Universo 2001/5/12)。

このようにカニャル郡全域にわたる法令へと拡大化した要因は、さほど明らかではな



いが、法令の前文を読むと多少推測できる (Registro Oficial No.318, 2001/5/3)。まず現行憲法の第62条が引用される。そこでは、国が多文化政策をとり、国民、多文化、多民族のアイデンティティを形づくる価値やその表現形としての豊かな歴史、言語、考古学の遺産を保存し、修復し、保護するための政策を確立することが述べられている。

さらにインガピルカの先住民が今回の行動の根拠としてとりあげた憲法第84条第10項と12項に触れている。国は、先住民が「彼らの文化遺産、歴史遺産を維持し、発展させ、管理すること」、および先住民が「儀礼を行う場所や聖地を保存することを認め、その活動を保証する」とある。以上の点から、インガピルカ遺跡は単なる遺跡ではなく、カニヤリ人の象徴であり、彼らの文化が生き続けていることの証であると位置づけている。

またインガピルカの事件に先立つ2001年1月30日付けで発令された法令R-22-049に基づき、国会は、カニヤル郡を「カニヤリ文化にとって揺籃の地であり、エクアドル考古学の首都である」と宣言している。すなわち、インガピルカの問題は、一遺跡の管理の問題ではなく、国の政治方針、そして民族としてのカニヤリ人の位置づけをまさに具現化する場として、国や先住民連盟執行部が認識していたと推測できるのである。

## 6 法令の意味するもの

こうして発令された大統領令の内容をみると、まず権限はインガピルカ城塞委員会から新たに発足するカニヤリ人インガピルカ協会に全面的に移譲されている。しかもこの新協会には、たしかに政府関係、文化財関係の役人も加わるが、インガピルカ・パロキアやカニヤリ郡の先住民が計3名も参加することが認められている。何よりも執行部議長は先住民でなくてはならないという条項が新たに付け加わったことが大きい (Registro Oficial No.318, 2001/5/3)。明らかに先住民側の勝利といえよう。

しかし、いくつか問題点はある。すでに述べたように、当のインガピルカの人々の本音は一遺跡の管理運営への参加という点にあった。ところが、最終的には、インガピルカ・パロキア内部のすべての遺跡、聖地の管理、維持、警備、保護、修復、復元にあたることを定められたばかりでなく、さらに広い行政区であるカニヤル郡内の遺跡、聖地、観光地を管理する別組織の設立を促し、自らも保護と修復の責務を負うとされてしまった。

ここには、インガピルカを核として、カニヤリ人の文化的統合を有機化させようとする政府や先住民中央団体の意図が見える。いずれにせよ、結果として、これまで中央の文化遺産庁、エクアドル中央銀行博物館、ならびにこれらの地方支局が担当してきた遺跡にまつわる文化行政全般を、先住民が主体となる団体に託すことになったのである。エクアドル国家という観点に立つならば、遺跡や文化をエクアドル国民の統合の象徴として直接的に用いることを半ば断念したことになる。一般にナショナリズムと考古学と

の結びつきが強いといわれるラテンアメリカで、一地方とはいえ、国が文化行政全般を先住民に託す例は希有といえよう。

## 7 カニヤリとインカ

しかし、それ以上に興味深いのは、遺跡管理の権利を主張したのがカニヤリという民族である点だ。ここで、カニヤリ人とインカとの関係について触れておこう。カニヤリ人は、インカが進出するまでは、今日のエクアドル南部高地で最大の勢力を誇る民族であった。インカ第10代皇帝トゥパック・インカ・ユパンキによるエクアドル遠征時に激しく抵抗したが、結局は征服され、最高首長ともども1万5000名もの夫婦がクスコに移住させられたという（シエサ・デ・レオン 1979:247）。

続く11代ワイナ・カパックも大軍を派遣し、キトに拠点を築いたばかりでなく、彼の生誕地であるカニヤリの土地に宮殿を築いた（シエサ・デ・レオン 1979:324-331）。ワイナ・カパックが1525年頃に死亡すると、エクアドルのインカを率いるアタワルパと、彼の異母兄弟でクスコにいたワスカルの間で対立が起こり、やがて内乱へと発展する。

カニヤリはクスコ派のワスカルにつくが、優秀なアタワルパ軍に打ちのめされ、見せしめとして多数の人々が虐殺されたという（シエサ・デ・レオン 1979:309-310）。その後、アタワルパの部下は南下を続け、最終的にはワスカルを捕らえ、統治権を手中に収めた。こうした最中に登場したのが、フランシスコ・ピサロ率いるスペイン人達であった。

いわばエクアドル南部は、インカ内乱の中心的舞台となった場所であり、スペイン人到着時には、まだ反インカの空気がみなぎる状態にあった。したがって、スペイン人による対インカ闘争において、カニヤリ人がスペイン側の協力者となったことも容易に理解できる。スペイン人がアタワルパを捕らえ、帝都クスコを目指して南下を始めると、カニヤリ人はこぞってスペイン軍に付き従ったのである（ワシュテル 1984:33）。またアタワルパ派が残る北部のキト攻略に際しても、スペイン軍に加勢したと言われる（Bravomalo 1992）。

このように歴史的経緯は非常に複雑ではあるが、カニヤリ人がインカとの抗争に激しく抵抗し、多くの犠牲を出し、最終的にスペインに与したのも彼らであったということは間違いあるまい。そのカニヤリの末裔が、インカの遺跡、いわば支配者、虐殺者インカの遺跡であるインガピルカを自らの文化財だと訴えているのである。

しかも現在のインガピルカの先住民自身は、目の前の遺跡がインカ時代にさかのぼることを理解している。遺跡名称から容易に想像がつくことは言うまでもないが、遺跡博物館には、年代が正確に記され、ガイドを含めた博物館の運営が、先住民の手に委ねられているのである。また、この遺跡は義務教育の場としても利用されている。さらに今回の調査の中でも、住民がインカの遺跡であると主張する場面に多く出会った。

さらに、インガビルカで毎年6月の冬至に行われる太陽の祭りインティ・ライミもこの点を示唆している。太陽信仰自体は、おそらくアンデス各地で古くから存在したと考えられるが、この祭り自体は、インカ帝国が国家統合の過程で組織化していった祭祀の一つと考えられる（ワシュテル 1984：122-124）。興味深いことに、インガビルカの住民は、この祭りに実に積極的な態度を示すのである。自らの祭りと言ってはばかりではなく、すでに述べたように、むしろこの祭りに自分たちが積極的に関与することができなかったことが、今回の事件の原因の一つであったほどである。この点からも、新たな大統領令が発令された直後に執り行われた祭りの盛況ぶりにも納得がいく（El Universo 2001/6/25）。

## 8 歴史観の組み替え

歴史的過程から考えるならば、今日のインガビルカの先住民が、遺跡の時代をインカと認識することはともかく、それを自らの宝であることを主張することにはかなりの飛躍、隔たりが認められるといわざるをえない。しかし、一見して首尾一貫性がないように見える彼らの意識や行動の裏には、彼らなりの生存戦略が見え隠れする。これは、矛盾点について問うたときに答えた先住民リーダーの一人パルチサカの言葉に凝縮されている。

「インカは侵略者かもしれないが、今の世では白人社会に虐げられた同じ先住民としてのつながりの方が強い。」<sup>9)</sup>

ここには、植民地時代以降、抑圧を受けてきた先住民の歴史が読みとれる。1534年には、スペイン人による現在のエクアドル地域の征服が完了し、翌年には征服者達に土地が分割された。アメリカ大陸の植民地におしなべて適用されたエンコミエンダ制度がこの地にも導入される。これは、先住民を保護し、キリスト教への改宗の義務を負う代わりに、先住民に対して貢租賦役を強要する権利を得るという制度であった。カニヤリ地方では、この権利がアルフォンソ・デ・モンテマヨールとフランシスコ・カンボスに与えられた（López 2001：76）。このエンコミエンダは一時、スペイン王室に返還されるが、実態として、先住民が強制労働に従事させられた点は変わりなく続いた。

その後、独立を経て、今日に至るまで、先住民が経済的、社会的抑圧を受け続け、これが1990年以降エクアドル各地で見られる先住民蜂起の要因の一つであると言われる（Araki 2002：148-150）。こうした厳しい体験を経たならば、アタワルパによる虐殺を脇へ押しやり、「白人」支配に反発の矛先を向けたとしても不思議ではない<sup>10)</sup>。

しかし、実態はもう少し複雑であるようだ。エクアドルとペルーとの間で長年続いた国境紛争による対立が関係していると考えられるのである。紛争の発端は19世紀初頭の独立時代にさかのぼる（Herz and Nogueira 2002）。両国の領土は、独立時に植民地時代

の線引き（ペルー副王領とキト・アウデウエンシア）が踏襲されたが、この基準自体が曖昧であったため、国境線を巡る衝突がおきた。それでも独立当初は、両国ともに、政治的狀況が不安定であったため、問題は大きくはならなかった。やがて、19世紀末からラテンアメリカ各地で生じた国民統合の動きの中で、領土、そして国境線への関心が高まるようになると、衝突は避けられなくなる。こうして1941年に両国は戦争状態に入った。

主たる争点は、アマゾン地域の線引きであった。翌42年、アメリカ、チリ、アルゼンチン、ブラジルの4カ国が保証国となって、リオデジャネイロ議定書が締結される。この議定書で示された基準に基づき国境策定作業が開始され、一時は紛争も収束に向かうと思われた。ところが、アメリカ軍による空撮で、当該密林地帯に新たな河川が発見され、線引き基準が曖昧になるや、対立は再燃する。エクアドルは議定書の無効を訴え、ペルーは有効性を主張するという平行線のまま年月が経つ。1981年に紛争が再発し、1995年には大きな衝突が起きる（Herz and Nogueira 2002）。

1995年紛争では、再びリオデジャネイロ議定書の保証国が、中立的な立場で、解決の手続きに的をしぼって仲介の労をとったため、交渉が円滑に進んだ。最終的に、1998年ペルー大統領アルベルト・フジモリとエクアドル大統領ジャミル・マワの間で和平協定が結ばれる。エクアドルにとっては、長年望んできた紛争対象地域への通行と通商の権利が認められ、ペルーにとっても、その地における主権（領土）が確定した点で重要な事件であった。この後、両国の関係は良好となり、政治、経済、文化の面で、従来にない交流が展開している。

さて、こうした270年以上に及ぶ対立が、国民統合と密接な関係にあった点はすでに述べた。なかでもイデオロギーや歴史観が果たした役割は少なくない。具体的には、独立直後のエクアドルで、国境の確定をインカ史に求めた動きもその一つであろう。繰り返すが、インカ末期の内乱では、帝都クスコ（ペルー）で即位を宣言したワスカと、キトを中心に北を治めるアタワルパ（エクアドル）の対立が見られた。結局、アタワルパ派が勝つわけだが、このことをもって、キト派、すなわちエクアドルが当該の紛争地域の主権を有する権利があるという論理が公然と主張されたという（Herz and Nogueira 2002: 26）。

確かに同じインカでも、今日のエクアドルにおいてはアタワルパが英雄視される傾向が強い。今後の検証が必要なのは言うまでもないが、おそらくは、ペルーとの対立の中で、歴史学、あるいは歴史教育の中でキト派、すなわちアタワルパ派のインカがエクアドルの統合の象徴として重視された可能性が高いのである。

したがって、事態は複雑さを呈する。インカ末期に、アタワルパによって虐殺されたカニヤリ族も、植民地時代を経て、エクアドル独立後は、むしろ限定付きではあるが、（キト派）インカ礼賛を謳う国家の歴史観に組み込まれていったと考えられる。これに加

え、植民地時代以来経験してきた抑圧状況がそろえば、現在のカニヤリ人の歴史観の重層構造がおぼろげながら見えてくる。さらに、これが1998年の和平合意によって、両国の対立が解消され、アタワルパ派という限定的インカの称賛から、エクアドルとペルーをまたぐ一般的な意味でのインカへの連帯感へと歴史観が推移していった可能性すらあるのだ。

最終的にはインカに共感を示すカニヤリの人々の言葉は、少なくともこれだけ複雑な回路を経ていることを理解する必要があるだろう。結局のところ、エクアドル国民、そして先住民にとって、インカはペルーからの侵略者ではなくなったのである。

## 9 結語

どのような過程を経たにせよ、統合の手段として国家が用いてきたインカへの共感を、今やカニヤリの人々は逆手にとり、国家に対して自らの権利を主張する根拠としているのである。ある意味で、グローバル化の中で、文化や文化財を政治的手段として、国家のみならずさまざまな集団が流用していく顕著な事例をみていることになるだろう。

世界遺産、人類の遺産という言葉は美しい。しかし、実際にこの理念の下で推進される遺跡観光は、グローバル化の一現象として、先進国の身勝手な郷愁やロマンを押しつける場にとどまり、この結果、途上国の遺跡は蝕まれ、そしてなによりも周辺住民を経済的、社会的に疎外していく危険性を秘めている。そのような中で、インガピルカの事例には、国家から押しつけられる歴史観を、状況に応じて巧みに組み替えながら、押し寄せる外部からの力に対抗し、苦境を乗り越えようとする先住民の自律的な姿が見い出せる。

とはいえ、現実には、カニヤリ人インガピルカ協会の運営は、厳しい状況にある。インガピルカや周辺の遺跡、あるいは無形文化財を含んださまざまな文化遺産の保全や運営、そして観光振興の権利を獲得したものの、活動資金は限られ、遺跡保存などの高度な技術的助言を専門家に仰ぐ体制もできていない。活動は停滞していると言えよう。

ある意味で、過剰なほどの権利を獲得したものの、権利を行使する術が追いついていないのである。こうした中で、研究者は、傍観者ではなく、媒介者として、彼らの戦略を咀嚼し、外部の社会に伝え、行動していく必要があるのではなからうか。でなければ、単に文化遺産を巡る紛争の繰り返しを目撃するだけに終わってしまうであろう。今、必要なのは、文化遺産の保全、修復に見られるように、「文化」という美辞麗句に飾り立てられる援助や開発を立案、実行する前に、文化遺産と地域社会の関係という初期条件を把握することであり、これなくしては援助も開発も存在意義を持ち得ないのである。

## 注

- 1) 本調査は科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 「ペルーにおける世界文化遺産と国家・地域の文化遺産との相互関係に関する研究」(研究代表者 關雄二)に基づいて実施された。
- 2) カニヤリ人インガビルカ協会長セグンド・パルチサカ (Segundo Palchizaca) へのインタビューより得られた (2003/1/21)。なおこの内容と発話者の人名に関しては、論文に掲載し、不特定多数の人々の目に触れる点を事前に知らせ、承諾を得ている。
- 3) セグンド・パルチサカへのインタビュー (2003/1/21)。
- 4) エクアドル共和国は22のプロビンシア (州に相当) よりなり、各プロビンシアはいくつかのカントン (郡に相当) に分かれ、カントンはさらにいくつかのパロキアに細分される (Vargas 2001)。プロビンシアのゴベルナドール (知事) は選挙で選ばれ、カントンでは、郡都にムニシピオとよばれる役所とそれを治める郡長アルカルデの役職が置かれる。これに対して、最下位の行政単位であるパロキアには、フンタ・パロキアルと呼ばれる議会が設けられ、行政の責任者として議長プレシデンテが任命される。なおパロキアは複数の慣習村コムニダに分かれるが、行政上の最小単位はパロキアである。
- 5) セグンド・パルチサカへのインタビュー (2003/1/21)。
- 6) セグンド・パルチサカへのインタビュー (2003/1/21)。
- 7) セグンド・パルチサカへのインタビュー (2003/1/21)。
- 8) セグンド・パルチサカへのインタビュー (2003/1/21)。
- 9) セグンド・パルチサカへのインタビュー (2003/1/21)。
- 10) このほか、1964年、1974年に実施された農地改革以後、大農場主、宣教師、村長など従来の権力者が没落し、これを機会に先住民が地域社会から放たれ、異なる集団間で連携するようになったことも先住民運動の隆盛要因として考えられている (Araki 2002: 149,150)。しかし同様の農地改革を経験した隣国ペルーでは、必ずしも先住民間の連携は生まれず、運動も盛んではないことから、この意見は一般化できない。

## 文 献

新木秀和

2000 「先住民と軍人の共闘?—エクアドル1月政変の背景と波紋」『ラテンアメリカ・レポート』17(1): 34-39。

Araki Hidekazu

2002 Movimiento indígena y estado plurinacional: El caso ecuatoriano. In Yamada M. y Degregori C.I. (eds.), *Estados nacionales, etnicidad y democracia en América Latina* (JCAS Symposium Series 15), pp.147-159. Osaka: The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology.

Bravomalo de Espinoza, Aurelia

1992 *Ecuador Ancestral*. Quito: Arte Graficas Senal.

Durán, Napoleón Almeida

2000 *Guía del complejo arqueológico más importante del país Ingapirca*. Cañar: Comisión del Castillo de Ingapirca.

Herz, Monica and João Pontes Nogueira

2002 *Ecuador vs. Peru: Peacemaking Amid Rivalry* (International Peace Academy Occasional Paper Series). London: Lynne Rienner Publishers.

López Monsalve, Rodrigo

2001 *Cuenca: Origen de su patrimonio cultural*. Cuenca.

シエサ・デ・レオン, ペドロ

1979 [1553]『インカ帝国史』増田義郎訳, 東京: 岩波書店。

Vargas, Edison Andi

2001 *Manual elemental de la Ley Orgánica de las Juntas Parroquiales Rurales*. Quito: Instituto para el desarrollo social y de las investigaciones científicas.

ワシュテル, N

1984 [1971]『敗者の創造力』小池佑二訳, 東京: 岩波書店。

雑誌, 新聞記事

Vistazo 2003/1/23

El Universo 2001/3/16

El Universo 2001/3/17

El Universo 2001/5/12

El Universo 2001/6/25

Registro Oficial 318, 2001/5/3

El Comercio 2001/4/24